

9. 建築物

9-2. 家の建て方

床に敷いた細いヨシは、2、3年で取り替える。虫が出るからだ。シマイマイ simaymay は、白く小さい虫の名で、床に引くヨシがかぶれたら出る虫だ。

ヨシを押さえる道具は、ソーラリ sōrari という。30cmくらいのエソルカニ esorkani(和名未詳)という木の皮を剥いて燠に入れて曲げる。エソルカニは、エウコツのニナル ninar(高台)の両わきに出る木でアペパスイ apepasuy(火箸)にもする。

[白沢ナベ氏]

9-3. 家屋の内部構造

9-3-1. 屋内とその配置

家の中の方向に関する表現

ロルンソ オッタ rorunso ot ta 上座に、上座で

ロルンソ カタ rorunso ka ta (同上)

ソ オッタ so ot ta (同上)

ソ カタ so ka ta (同上)

家の中での方位表現

子供がロルンソ rorunso でおしっこをするのを厭がり、子供をロルンソに上げない。しかし、夜はロルンソに寝かせた。エイタサ ソ オッタ eytasa so ot ta。(上座で遊んでいるいる子に)下座に来なさい。

ウトウッタ アリキ ヤン utut ta arki yan! (このときアリキ arki の代わりにサブ sap とは言わない。) そんなに上座で遊ぶものではない。下座に来て遊びなさい。

エイタサ ロルンソ オッタ イテキ シノツ アン ペ ネ ナ。ウトウッタ アリキ ワ シノツ アン eitasa rorunso ot ta iteki sinot an pe ne na. utut ta arki wa sinot an!

火の側に来て火に当たれ

アペ サム タ サン マ アペクル ape sam ta san ma apekur! (サン san は炉縁(ろぶち)に近寄ること。サンの代わりにエク ek と言ってもよい)

(下座に座ったお客さんに) 炉に沿って(こちらに)来て、火に当たりなさい。

アペ ペカ アルキ ワ アペクル ape peka arki wa apekur!

(上と同じ状況で) もっと上座にずって、火に当たりなさい。

ナ エロンネ シヌシヌ ワ アペクル アン na eronne sinusinu wa apekur an! (シヌ

sinu ないしシヌシヌ sinusinu というのは、座ったまま、床に手をついて膝をずらしながら移動していくこと。横座りしている女の行う動作)

(下座から) 上座に行く・来る

エロンネ アルパ・エク eronne arka/ek

上座から (下座へ) 行く・来る

エロンネ アルパ・エク eronne arpa/ek

[白沢ナベ氏]

ござの収納

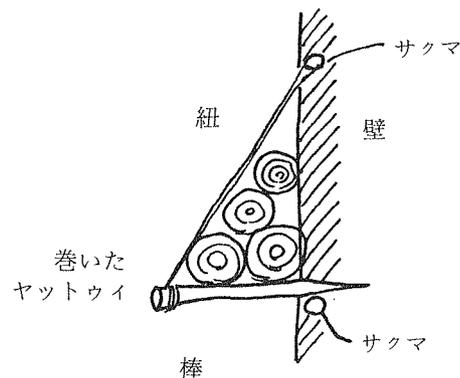
敷きござを丸めて(アウコカラカリ aukokarkari)保管して置くところをヤットウイ トウナ yattuy tuna という。壁に横木を差し、棒2本を壁に直角に置き、それを天井から2本の紐を吊るして縛る。その間に巻いたござを重ねて収納する。床からは、浮いている。

[白沢ナベ氏、小田イト氏]

チタルペ citarpe は巻いて壁のヤットウイ トウナ yattuy tuna に掛けておく。ヤットウイ トウナは2本の棒を壁に刺し、上から紐で支え巻いたチタルペを下げしておくものである。

[白沢ナベ氏]

図21. ヤットウイ トウナ yattuy tuna



[小田イト氏]

家のなかでは、夏にシマイマイ simaymay (シラミ [ウルキ urki] に似たもの)、タイキ tayki 「ノミ」が出る。

[小田イト氏]

戸口の神は、チセアパ(家に入る戸口)の真上の向かって右手に夫婦の神がいる。アパサム ウン カムイ エカシ apasam un kamuy ekasi とアパサム ウン カムイ フチ apasam un kamuy huci である。イナウの高さくらいの棒をイナウキケで鉢巻をして、アナウと一緒に置いておく。その棒は、戸口の神の杖で悪い人が来たら、エアパコキク eapakokik し、よい人が来たらエアパチャカ eapacaka する。

[白沢ナベ氏]

土間の神。外庭を ソユン ミムタル soyun mimtar という。ここを守るのが、ソユン ミ

ムタラ オルン エプンキネ カムイ soyun mimtar, mimtar orun epunkine kamuy である。炉 (アペオイ apeoy) の下手からセモロ semor (下屋) に続く土間をアウン ミムタル aun mimtar 内庭という。ユーカラなどには、ミムタル エカシ mimtar ekasi とミムタル フチ mimtar huci が出て来る。

物語では、チトゥイエ アムセツ アムセツ カ タ イコロ カ ヌエ トミカ ヌエ cituye amset amset ka ta ikor ka nue tomi ka nue 「高い寝台の上で宝刀に彫物をしている」と描写される家の守り神 (チセ コロ カムイ cise kor kamuy) は、正式には、ピト シル ピト イトゥンチ カムイ シル カムイ イトゥンチ pito siru pito itunci kamuy siru kamuy itunci という名で呼ばれる。これは、アペフチ apehuci (火の神) の旦那であると言われていている。ロッタ rot ta (上座) にいると考えられていて、太い木で作ったイナウをロッタの隅に置いて、毎年イナウキケ inawkike (削りかけ) を鉢巻にして巻く。5年も10年もたつて古くなるとイナウチパ inawcipa (祭壇) に置く。

家の神(チセ カムイ cise kamuy)は、女の神で、家の中は、チセ カムイ ウプソロ cise kamuy upsoro (家の神の懐) と考えられている。夫の神は、チュブ カムイ cup kamuy (お天とうさま) だと思う。家を暖め雪を溶かすからだ。新年を迎えるときに(アシリ パ エク クス asir pa ek kusu [小田イト氏]) チセ カムイ アノミ cise kamuy a=nomi (家の神へ祈る) をしてロルタの周りの壁にイナウキケを刺す。

〔白沢ナベ氏〕

9-3-2. 炉とその周辺

炉の上にある火棚は、アペオイ トーナ apeoy túna という。ヤットウイ トーナ yattuy túna という。両方とも単にトーナ túna ともいう。棒を2本天井からぶらさげる。それをトーナと呼ぶ。

ヤットウイ トーナは、イトムンパヤル itomun puyar (南窓、即ち左座側) の上座側にある。白沢ナベ氏の家は、神窓が川下の方に向いていた。戸口が川上側で、イトムンパヤル itomunpuyar が川に向いていた。

チタルベ トーナ オルン チタルベ ウカオ ヤン citarpe túna orun citarpe ukao yan 「花ゴザをしまいなさい」という。

〔白沢ナベ氏〕

火の燃やし方

太い丸太を炉の上手に置き、それを枕 (エニヌイペ eninuype) として細枝 (柴 チャイチャイ caycay) や薪 (割り木 チペルパニ ciperpani) を寄り掛け、燃やした。火をつけるときは細枝の下にガンビのたきつけを置いた。チャイチャイは梢のほうを上手にして置いた。薪の先が燃えると薪を上手に押しだした (アペ エレポ ape erepo! 「薪を押しあげろ!」)。丸太の下手は炉のまん中 (アペオイノシキ apeoy noski) にあたり、そこに燠 (ウサツ usat) がたまる。そこをアペソッキ ape sotki (炉のなん中) という。燃え尻 (アペケシ apekes)

はそのままにして寝ると跳ねて危険なのでアペソッキのなかに埋める。朝にはこれがおきになっており、残ったおきを寄せ集めると(エウカオ eukao すると)再び火がつく。もえしりを灰のなかに埋めることをアペ ウナ ape una という(アペ ウナ ワ ホッケ ape una wa hotke)。

[白沢ナベ氏]

火に関する表現

火に当たる アペクル apekur

私は火に当たりたい カペクン ルスイ k=apekun rusuy

9-4. 屋外の構造

水汲み場

昔の人は千歳川から直に水をくんで飲んでいて、一軒ずつ水汲み場(ペタル petaru)があった。川の中に杭を立て、岸からその上に板を載せて水汲み場とした。

[小田イト氏]

舟着き場

舟はペタル petaru(水のみ場)の上手に杭を立てそれにつなぐ、この杭をイクシペ ikuspe とかチプ アシリコテ イクシペ cip a=sirkote ikuspe という。舟の尻がペタルに支えられるようになる。舟着き場のことをチプヤプシ cipyapusi という。舟着き場や水汲み場にイナウを立てることはなかった(立てれば確かにまてだが)。

[白沢ナベ氏]